

高尾山報

令和元年6月号



開眼碑

高尾山
交通安全祈願碑
令和元年
五月晴

鈴木定吉

交通安全祈願碑開眼法要厳修

五月一日(水)

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(84)

花の色に

染めし袂の

惜しければ

衣かへ愛さ

今日にもあるかな
〔拾遺集〕源重之
春の花の色に染めた衣
が名残惜しいので、衣
更えをしたくない今日で
あることよ

六月一日は更衣(衣更
え)です。僧侶の装束も
夏衣に変わりました。衣
更えは、平安時代から行
われていた年中行事で、
一年を二期に分けて、旧
曆四月一日と十月一日に、
お祓いの意味を込めて衣
服や調度を改めたのが始
まりとされています。六
月からは夏、十月からは
冬の装いへと変わります。
最近では「クールビズ」
という用語も定着してき
ました。環境省では、温
暖化防止と節電を目的と

した衣服の軽装化を推
進しており、今年度は五
月一日から九月三十一日
を実施期間としています。
始まりが衣更えよりも
一ヶ月早いのは、夏の訪
れが年々早まっているか
らでしょうか。

冒頭の「花の色に」の
歌では、春が名残惜し
くて、桜色の春衣を脱ぐ
のをためらっています。
ただ、この頃は五月中で
も三十五度を超える猛
暑日があり、むしろ早く
脱ぎ捨てたくなるような
気持ちにもなります。衣
更えに春を惜しむという
感覚は、今後は理解し
がたくなっていくのかも
しれません。
あちさるの
下葉にすだく
螢をば
四ひらの数の
添ふかそを見る

〔藤原定家「拾遺愚草」〕
紫陽花の下の方の葉に
集まる螢は、四枚の花び
らを増しているように見
えるよ

陽が落ちて夕風が吹き
抜ければ、少しは涼しさ
を感じるでしょう。庭先
を眺めれば、雨上がりの
紫陽花に、螢が集まって
いるかも知れません。紫
陽花は、集まるという意
味の「集つ」と、濃い青
色を表す「真藍」が合
わさって名付けられたと
言われています。この歌
では、紫陽花の青や紅の
小さな花弁に、緑や黄色
オレンジ色の螢の光が加
わっているのでしょうか。
梅雨時期ならではの黄昏
時の光景です。
紫陽花は、土壌の性
質や咲いから散るまで
の間に花の色を変えるこ
とから「七変化」「八仙
花」などの異名を持って
います。こうした変化す
る特徴から、紫陽花の花
言葉の一つに「無常」が
あるのでしょうか。
これまでおよそ一年間



「無常」の花言葉を持つ紫陽花
(撮影・高岡輝幸氏)

にわたって、この世の全
てのものは移り変わり、
一瞬も同じ状態に留まら
ないという「無常」(常
無し)をテーマとして書
き進めてきました。これ
まで見てきたように、『平
家物語』や『方丈記』の
序章、西行(一一八〇
一一九〇)の和歌や「い
ろは歌」など、多くの文
学作品に「無常」が表れ
ています。その中には「移
ろうからこそ美しい」と
いう仏教的無常観が見ら
れました。
兼好法師(一一八三頃
一二三二以後)の「徒
然草」にも、「無常」を
語る章段があり、その中
の一つに、次のような話
が記されています。

五月五日、上賀茂神
社の競馬を見に行った時
のこと。牛車の前に人々
が立ちふさがって競馬を
見ることができなかった
ので、牛車から降りて、
馬場の柵の側まで近寄ろ
うとしました。しかし、
その辺りには人がさらに
多く、とても分け入れそ
うがありません。
その時、向かいにある
棟(榎)の木に登って、
木の枝のまたに座って見
物していた法師(僧侶)
がいました。法師は、木
にしがみついたまま眠た
い様子で、落ちそうにな
ってから目を覚ますとい
う状態でした。
これを見た人々は馬鹿
にして、「なんという愚

折り折りの記 (118)

五月来ぬ元号「令和」に改たむ

波多野 重雄

政府は四月一日、菅官房長官は五月一日に元号を「令
和」に改元と発表。平成の小淵長官を思い出した。
国書の万葉集の梅花の「序」は大伴旅人を中心とす
る人々が詠んだとされる。「初春冷月氣淑風和梅披鏡
前之粉・蘭薫・麻後之香」を典拠とした。新元号「令
和」の考案者は万葉学者の中西進先生という。
「令和」は六四五年の大化の改新以来、二四五個目。
現代では元号法によって、一世二元号制。「令月」も漢
籍にあり観梅も海を越えて来た心である。
平成の三十年余の長き「平和」は有史以来初めてで
ある。令和元年初日、新天皇陛下は百二十六代天皇と
して御即位。皇居で首相らに謁見。上皇陛下、上皇后
陛下はこの間、国民の象徴としての御責務を御遂行の
傍ら、全国民に寄り添いし御心に、深甚なる敬意を表
する次第です。
(高尾山健康登山の会会長)

洋館静編物	高き窓に 向き静 手編みする婦人 女性らしさを極めしなやか
婦女四五人	洋館にて静かに編み物をす 婦人四く五人、椅子に坐り
編物坐椅子	編み物をす…
陽光透高窓	陽光は高き窓(ステンドグラス)を 透き抜け、
微笑完成喜	皆、微笑みて完成を喜ぶ…

か者だ。あんな危ない枝
の上で眠るなんて」と言
い合いました。
その時、私は何とはな
しに「私たちに死が訪れ
るのは今すぐかもしれな
い。それを忘れてのんき
に見物をしている。その
愚かさば、あの法師より
も勝っているのに」と呟
いたところ、前にいた人々
が「本当に仰る通りです。
私たちこそ愚かです」と
言つて、皆が私のいる方
を振り返つて「こちらへ
どうぞ」と言つて、場所
を空けて入れてくれたの
でした。
これくらいのことば、
誰もが思いつくのに、意
外な言葉が胸に突き刺
さつたのでしょうか。人は、
木や石ではないので、時
によつては、このように
心打たれるのです。
〔徒然草〕四十一段〕
ここに登場する兼好と
覚しき人物は、冷や水を
浴びせかけるような言葉
を見物人に投げかけまし
た。この世に生きる人々
に対して、無常が他人事

高尾山天狗まつり

五月十八日(土)

世の中は、目にも留ま
らぬ早さで過ぎていく。
ちろり、ちろり」と
室町時代の小歌の一節
です。「ちろり」は、ほんの
わずかな動き。「無常迅速」
という格言があるように、
世の中は極めて早く移り
変わり、その中でも人も紫陽
花のように年齢に応じて
様々に色合いを変えてい
くのでしょうか。梅雨時の雨
が「ぼつぼつ」「ザーザー」
降るように、人の命は「ち
ろりちろり」と経りに行きま
す。
(栃木北部教区普濟寺)

平成最後の下原刃 高尾山へ奉納される



四月二十五日(木)



刀匠の佐藤重利さんと菅谷執事長

去る四月二十五日、高尾山上においてNPO法人「武州のよりあい(磯沼孝代表)」による、平成最後の「下原刃」高尾山南無飯縄大権現」の奉納式が行われました。

奉納式当日には、磯沼代表らによる日本刀での試し切りの奉納演武が行われ、菅谷執事長に手渡しで奉納されました。

下原刃は八王子市内の恩方地区などで室町時代末期から幕末期にかけて作られていた刀でありました。以来製法は廃れておりましたが、刀匠の佐藤重利さんの二十年にわたる研究の結果、現代に蘇りました。

刀の素材となった砂鉄は市内を流れる浅川流域で採取されたもので、昨年の夏に薬王院自動車祈祷殿広場において、たたら製鉄を行い玉鋼を作りました。磯沼代表は「市民で作った故郷の刀です。郷土刀として末永く伝えていきたい」と語っておられました。



奉納演武を行う磯沼代表



奉納された刀を前にしたNPO会員の皆様と記念撮影

元号が令和と改まった五月一日、朝方までの雨が止み快晴となった高尾山麓の清滝駅前において、高尾交通安全協会により建立された、「交通安全祈願碑」の除幕式と開眼法要が、菅谷執事長御導師のもと執り行われました。

祈願碑には大山御貫首より揮毫を頂きました、「一心祈願 人車一体 愛情運転」という言葉が刻まれております。

高尾交通安全協会の小松政見会長によりますと、「建立された場所は登山道とケーブルカーへの道への分かれ道となり、多くの登山者の方々が集まる場所となります。高尾山にお越しになられた方々が少し立ち止まって交通安全について考えて頂ける機会となれば」とお話されておりました。



建立された交通安全祈願碑



僧侶の読経と共に除幕式が行われた



交通安全祈願碑を背にした交通安全協会の皆様

交通安全祈願碑開眼法要厳修
五月一日(水)

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

文政く天保期の動向

文政年間に刊行された『武蔵名勝図会』(文政三年・一八二〇)、『新編武蔵風土記稿』(同五年・「多磨郡之部」上梓)、『高尾山石老山記』(同「一〇年」といった地誌や紀行文には、高尾山内の様子が挿絵に描かれており、その様子が一目瞭然となる。

飯縄権現社と薬師・護摩・大日の三つの堂、そして別当薬王院の本堂・庫裏・書院・宿坊、それ以外の塔頭・小祠・小堂に至るまで、狭隘な山上にひしめくように堂宇が稠集していた様子が手に取るように分かるが、それは今日に匹敵する盛期を感じさせる。大檀越として紀州家の存在は少なからぬものがあつた。

ろう。

十一代藩主斉順

和歌山藩十代藩主徳川治宝は領内で発生した大規模な農民騒擾の責を負う形で、文政七年(一八二四)に隠居となつた。第十一代藩主には養嗣子の斉順が就任した。斉順は享和元年(一八〇一)九月九日、將軍家斉の七男として誕生している。幼少の頃、御三卿の清水家の嗣子となつたものの、文化二年(一八二六)にあらためて治宝の養子に入つていた。

斉順の治世の間、『南紀徳川史』には領内の孝行者褒賞の記事が度々見られる。文政一〇年には男山陶器製造場が開設され近隣で産出する石で

磁器の製造をはじめた。天保七年(一八三六)は飢饉の年で、和歌山藩領にも大きな被害があつた。天保一〇年には『紀伊統風土記新撰』が三〇年以上の歳月をかけて完成している。しかし、斉順の藩政を支えた重臣は何れも大蔵治宝の側近であり、藩政の実権は治宝が握り続けたという。先の男山の製陶も治宝の殖産興業策である。

治宝は才気ある中下級藩士を積極的に登用し、藩の経済政策を推し進めたりも消費の拡大による商業活動の活性化を主張するなど、革新的な発想を持つていた。一方、和歌山藩には水野・安藤という幕府から配属された家老が付いていたが、將軍家から養子に入つた斉順の後ろ盾となり、彼ら守旧派と治宝側近との間には軋轢もあつたと言ふ。文政二年(一八二九)五月の末は新曆では梅雨の盛りにあたるが、体調

を崩した徳川重倫が数日後の六月二日に死去した。天明六年(一七八六)に出家した後は高尾山との関わりも絶えていた。若き頃には何かと悶着があつた重倫だったが、八三歳の大往生だった。諡名の観自在院に仏法への帰依篤い人柄が示されている。

紋付提燈への合印頂戴

次に紀州家との間で動きが出るのは天保七年(一八三六)のことである。薬王院は幕府に対し同年六月付で葵紋付の高張提燈・弓張提燈各二張りの所持を届け出ている。前者は正・五・九月の紀州家に対する祈禱と祭礼の折に使用し、後者は御札守を献上する際、山主が用向きで紀州家を訪れる際に使用しているとのことである。



葵紋付の提燈について寺社奉行へ届け出た書面の写し



寺社の格式を示す意味でも重要な意味をもった

料がある。まず、四月二十九日付の、寄附の提燈に目印を付けるよう寺社奉行から申し渡された。こちらで提燈へ目印を付けるので残らず差し出すようにという書面があるが、書きぶりから紀州家よりの音信と判断できる。もう一通、六月二日付の書面は法類の蓮乗院から昨二日に紀州家同朋衆から連絡があつて出頭し、提燈が出来たので明日勘定所へ受取りに来られるよう申し渡された。二日提燈を貰い受け、その旨、紀州家役人中と寺社奉行へ届け出ると記している。この二通は何れも年欠であるが時

系列に整合するので、先の届書と同年と判断される。一連の手續きを蓮乗院が薬王院の代理として江戸に出府しておこなつたということである。この背景として、その時期、幕府が葵紋付の品の濫用を取り締つていたことが指摘できる。文政二年(一八一九)六月、幕府は出火の節に葵紋付の提燈を持ち歩く者がいて火事場の差し障りになつているとし、御用を勤める以外の使用を禁止している。また、諸大名に対して出入りの町人に對して紋入り提燈をみだりに渡さないようにと達しがあつた。大名家への「出入り」については以前にも触れたが、御用の献上や屋敷の宮繕、生活資材の調達などについて御用達の關係を結ぶ町人があつた。

葵紋付の品を用いることについて

ては、天和三年(一六八三)に、御用を勤める際の提燈・長持には家紋を付さず「御用」という文字だけを記すようにと達せられていたが、その後、等閑になつていた。文政八年八月には同様の趣旨が再度触れられており、祭礼の時などに軒先へぶら下げるようなケースも述べられるなど、葵紋付の提燈を用いることはよく行われていたようだ。天保三年に至つて公儀御用と区別するため合印を付すことに決するが、今回の届けについてその関わりを考えられる。

先にあつた火事場へ提燈を下げてゆく意図は不明だが、水戸黄門の印籠よろしく葵紋を振りかざして我意を通すような行為が横行していたことは想像に難くない。一方、葵紋の効き目は徳川の權威が絶対的なものであつたことを示しているだろう。高尾山の場合も、飯縄権現社に葵の紋幕が掛かり、開帳場に葵紋の提

灯がかざされれば、それは当代随一の權威として大いに威力を發揮したことだろう。

天保の由緒書

幕府への届書の写しには奥書があり、「すべて願書ならびに由緒書など右御同朋衆へ差出」とあるが、この由緒書の副本が薬王院文書の中に残っている。それまでも紀州家との関わりについて記した書面はあつたが、この天保度のものは最も詳細であり、提燈への合印頂戴の一件においては、この由緒書を作成する契機となつた点にも意義があるだろう。それだけ葵紋付の提燈の使用が重視されたとも言えるが、その記載からは、薬王院が紀州家との關係をどのよう認識していたかがわかる。

- ・重倫による自筆書状、八千枚護摩供十座・星供・秀興と上京時の諸社祈禱・十方枚護摩供の執行、和歌山御殿への御札献上
- ・御札献上の再開と治宝へのお目見え
- ・定心院尼登山による八千枚護摩供執行
- ・赤坂中屋敷地鎮祭というように、薬王院としては祈禱所再興願いの寛政九年(一七九七)以来、三九年ぶりに歴代藩主との関わりについてアピールする機会となつた。
- ・藩主斉順は弘化三年(一八四六)に死去。この後、幕末に向けて紀州家当主の座は不安定に揺れ動くことになる。
- ・おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

厨房で学んだこと

オリビア・キベル

ハーバード大学を卒業し、本年の一月から三月にかけて、当山でインターンとして精進料理を学んだアメリカ人オリビア・キベルさんの寄稿を紹介します。

高尾山薬王院で精進料理の勉強をした日々が、このようなものになるとは想像もできませんでした。朝起きて、ケーブルカーで山を上がり、この山寺を囲む峰々と遠くの都会を眺めながら、杉の木が茂る壮観な森を歩く特別な機会を、私はいただきました。

一年前に精進料理がどういうものか質問されたとしたら、私はきつと答えられなかったと思います。けれども、ありがたいに、毎日大本堂の前で一礼して本坊内の厨

房に入ると、労をいとわず、親切に惜しみなく私に指導してくれる方々がいました。とりわけ深い歴史を持つ薬王院の料理長である坂本さんの下で学べる特別な機会をいただいたことに、興奮と信じられない思いでいっぱいでした。

誰かと分かち合う、信仰上大切な意味のある食事という概念は、私の人生にもありました。金曜日の夜、ユダヤ人の祖母と、安息日のためのハラという特別なパンを食べた記憶があります。また、大学時代には、私が過ごした寮では毎晩すべての学生が集まって、自分たちで準備した食事を食べ、互いの話を耳を傾けていました。

私は文学の学位を得た後、マイケル・C・

ロックフェラー記念奨学金というものを獲得することができました。これは、まったく新しい文化に一年間飛び込んで、何らかの目的を持って探求、挑戦、発見などの活動をするための支援で、学術的な調査・研究のための奨学金ではありませぬ。

私は、寛容さと信仰が特徴的な日本の文化を探るために、日本へ行くことを選びました。私が関心を持っていたテーマはこういうものでした。「外部の人間が食事を共にすることで、いかにして共同体の一員となるのか」、「食事を伴うこと、あるいは食事を頂くことで、身体のみならず心と精神がいかに活性化されるか」。

私が最初に覚えた日本語の一つは「いただきます」でした。私が勉強した本では、「食物への感謝」とそのまま訳されています。ここ薬王院の厨房で、私はその言



坂本料理長(左)の指導を受ける筆者

葉の背後にある意味や感覚が身体で分かるようになりしました。

料理に使う大根への感謝の気持ちは、包丁を握る直前に起こるのではありません。厨房に居るうちに、まず土があつて、生産者があつて、いくつもの過程があります。それは徐々に展開していく旅です。

里芋への感謝の気持ちを含めて、ゆっくり包丁を入れると、美しい六角形の断面が現れます。注意深く、慎重かつ丁寧に扱おうという、感謝を伝え

る行為によって、この美しい結果が生まれます。そうしてその食事を食べる人も感謝の気持ちを抱くことができるのです。

坂本さんはこう言います。「ゆっくりだよ、ゆっくりね。これはたぶん厨房で一番聞いた言葉だと思います。この言葉を聞くと、私自身も食物の旅の一過程に今関わっているということを意識します。そして、私の行為とその結果に伴う意味についてあらためて気づきます。すなわち、ひとつひとつの過程が重要で

あり、意図がなく行われるものはありません。盛付けも一種のアートです。天ぷらを盛り付けるとき、坂本さんにはいつも「想像してごらん」と言われました。あるとき「山水画はどのように描かれている?」と聞かれました。私は天ぷらを盛り付ける前に、日本庭園の庭師になったつもりで、私の手がこれから「設計」するものを心に描きます。私にとって新しい思考なので、頭で考えてから手が動くまでに時間がかかりますが、盛り付けに對する新たな愛情の形に、大きな喜びを感じます。

薬王院の厨房では、ただ仕事をこなすだけでは十分ではありません。どれだけ時間がかかろうとも、良い仕事をするのが目的です。このことは調理のみならず、鍋や釜をきれいに磨くことなど、すべてに及びます。高尾山の厨房に来るまで、使われて八十年近くになる

鍋など見たこともありませんでした。しかもそれが鏡のように輝いているのです。私は鍋を一つ磨くのに三十分かけたかもしれません。しかし、このように丁寧かつ細かいところは、敬意があることを意味します。それは、調理された食事、使われた設備、そして将来この鍋を使う人々への敬意と感謝です。

アメリカでは、そういったことは省みられない些細なことであり、誰も進んでやらない仕事です。どうしてそれが大切なのか、考えないことだからです。「料理を作るのに関係ない」、「洗いや拭き」は、アメリカ人は考えません。ここ高尾山では、私も各過程を大切にしている伝統の一端です。境内に出て、鍋などを磨くための柚子をもぎ取るような日常の行為にさえ、私には喜びがありました。坂本さんからは、日々

たくさんのお話を学びました。坂本さんは料理長のみならず、アーティスト、庭師、科学者、教師でもあります。いつも笑顔で厨房に迎えてくれて、親切に辛抱強く、ひとつひとつの作業を教えてくださいました。そのたびに私は学びと実践のためにここへ来ているのだと思ひ出させてくれます。坂本さんは身振り手振りを交え、ゆっくりと簡単な言葉を繰り返して伝えてくれました。

私が日本語で流暢に会話できないことは、私が深く関わらない言い訳になり得たでしょう。けれども、厨房の壁に貼られた英語が書かれた紙の数々を見れば、坂本さんと交わした言葉の深さが分かります。それは材料の名前から、包丁の使い方、浸透圧、そして植物と米粒の手書きの絵まで多岐にわたります。坂本さんをはじめ、同じく厨房の細谷さん、飯

森さん、勝目さんたちほど親切な先生のグループはないでしょう。私は薬王院で過ごした時間の中で、思いやりにあふれ、鍛錬を怠らず、毎日を生き活きと過ごしている人たちがいる居場所を見つけました。ダシの香りが満ち、私の成長に力を貸

してくれる方々と、明るくて温かい空気にあふれた、このような厨房をまったく想像もできませんでした。この先、私が進んでいくための居場所と技術、そして思い出をくださった皆様に、感謝申し上げます。(翻訳:法務部・上村公昭)



料理だけではなく、日本文化を学んだ筆者八王子芸妓組合の皆様との記念撮影

高尾山若葉まつり開催

四月六日～五月二十六日



八王子芸妓組合による祝いの舞



語り部の会による「とんとん昔話」



不動院で行われた野点



童謡歌手・雨宮知子さんが熱唱する



大型連休期間には大勢の参拝者や登山者が新緑映える高尾登山に訪れた

高尾山内八十八大師巡り



道中では各御大師様に法衆を上げた



大師堂前にて先達の山伏と記念撮影

五月十四日、高尾山内八十八大師巡りが行われ、小雨降る中で総勢三十二名の方々が参加されて高尾山中を巡拝し、お大師様との御縁を結ばれた。

巡拝は清滝周辺のお大師様から始まり先達の僧侶とともに、「南無大師遍照金剛」とお大師様の御宝号をお唱えしながら急峻な琵琶滝道を登る徒歩修行を行い、薬王院までの道中で各お大師様に法衆をあげました。

山上に到着し、大師堂周辺の八十八大師御砂踏み霊場を巡り、その後大本堂にて御護摩修行に参加されました。精進料理の昼食後には、一号路を下って道中の各お大師様を巡拝して不動院に到着。その後は不動院にて巡拝の成満を御本尊様に奉告する献灯式が行われた。

高尾山健康登山親睦会 高尾山清掃



きれいな高尾山を守るため清掃を行っています

高尾山健康登山親睦会では、毎年、波多野重雄会長（写真左より五人目）他、有志の皆様が集まり、ゴミ袋を片手に高尾山を清掃しております。

五月十八日、一行は山麓よりゴミを拾いながら登り、信徒休憩所にて休憩を取りました。その後は各登山道に分かれてゴミ拾いを続けました。

波多野会長は「昔と比べるとゴミが少なくなってきたね」とお話されておりました。

観音菩薩の宗教

18

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩は男性か女性か

仏教を創始したブッダは、古代インドのカピラ国に世継ぎの男児として生まれた。出家する前の名前のシッタールタ(悉達太子)にしても、悟りを開いた後の呼称のブッダにしても男性形であり、ブッダが男性であったことは疑いようがない。古代インドのサンスクリット語やパリー語には男性形・女性形・中性形という三つの文法上の性(ジェンダー)があり、その語形から人名や呼称では男女が判別し得る。普通名詞ではジェンダーと生物学的な性とは常に一致するわけではないが、人名では語形上、男女が名分される。シッタールタが後世の命名という余地があるにせよ、その語形は

明らかに男性の名前であることを示している。

ブッダは王子であった時代、父王シユットドーダナに大切に育てられ、暑気には涼しい部屋を、寒気には暖かい部屋を与えられるなど、何不自由ない環境にあった。しかしブッダはそれに安住せず、人生の悩みを克服するために城を出て修行の道に入った。この時代のブッダを「悟りを求める人」という意味でボーディサットヴァと呼ぶ。「ボーディ」とは、「目覚め、悟り」で、サットヴァは「あるもの、いるもの、生き物、人、衆生」などを意味し、これを漢字で写したのが「菩提薩埵」、略して「菩薩」である。修行時代のブッダを称したボーディ

サットヴァも男性形で、男性として生まれたシッタールタが男性のまま菩薩になったといえる。

ブッダ入滅後、五〇六世紀経つて興起した大乘仏教では、菩薩の思想と信仰が重視された。そこでは観音菩薩をはじめ、弥勒菩薩や文殊菩薩や地藏菩薩などが新たに登場し、人々に篤く崇拜された。それらの菩薩は修行時代のブッダをもとに、大乘仏教で展開した思想が神格化したものである。先に本連載で見たように、



観音菩薩は女性的尊格とも捉えられてきた
(高尾山薬王院・子育観音立像 1987年)

観音菩薩は慈悲によって衆生を救済する心が結実した尊格であった(「観音菩薩の宗教」など)。観音菩薩の原語には、アヴァローキテーシユヴァラとアヴァローキタスヴァラが伝えられているが、「観音菩薩の宗教」④、いずれもブッダ同様、男性形であった。大乘仏教時代の菩薩に修行時代のブッダが投影しているとすれば、観音菩薩が男性であることも当然であろう。ところが、悲母観音・慈母観音などの図像に見ら

れるように、しばしば観音菩薩は女性、もしくは女性的な尊格と捉えられてきた。一体、観音菩薩は男性なのであろうか、女性なのであろうか。観音菩薩の性別を中心に、各地の観音菩薩信仰の変遷を扱った大部の書に彌永信美「観音変容譚」(法蔵館、二〇〇二年)がある。それによれば、インドにおいて男性の菩薩として尊崇された観音菩薩は、中国や日本で女性または女性的と意識されるようになって

た。中国における観音菩薩の女性化の傾向は、六世紀ごろから認められ、十世紀には女性と意識された白衣観音が現れた。近世にいたると、遅くとも十六世紀ごろから福建省で子供を抱く白磁製の観音像が作られ、日本にも盛んに輸出された。同書によれば、子供を抱く女性神像の原型はハリーデー(鬼子母神)と推定される。女性として信仰された観音菩薩は、同時に女性を濟度し、安産などをもたらす菩薩としても尊崇され、白衣観音や魚籃観音として図像的に表現された。一方、日本では観音菩薩の性別は「無意識的の曖昧」と評された。例えば狩野芳崖の悲母観音は、女性的でありながら髭を蓄えていて性を決定することを躊躇させる。篤い観音信仰を有した河鍋暁斎の悲母観音は、髭がなく、ふくよかな体つきから子育てを経験した妙齡の女性を想起させるが、性別を

断定する根拠は明示されていない。日本では仏教以前の信仰と仏教との習合も見られ、例えば二臂の抱児形の子安観音は、子安の神と観音信仰が習合したものとされる。東京・八王子の子安観音はその代表的な例で、子宝を授け、子育てを助ける神と信じられてきた。観音菩薩の女性化に関して経典的根拠を求めてみると、第一に観音信仰に大きな役割を果たした『妙法蓮華経』「観世音菩薩普門品」、別名「観音経」を挙げることでできる。「観音経」には観音菩薩が衆生の願いに応じて「三十三身」を現じて濟度すると説かれ、このうち七身が女性の身体とされる。すなわち、比丘尼身(女性僧侶・尼)、優婆夷身(在家の女性信者)、長者婦女身(富豪の妻)、居士婦女身(学徳高い在家信者の妻)、宰官婦女身(官吏の妻)、婆羅門婦女身(ブラフミン階級の妻)、

童女身(幼き女の子)がそれである。観音菩薩は時宜に応じてこれらの女性の姿を取って衆生を濟度するという(「観音菩薩の宗教」⑨)。彌永信美(前掲書)は、「この『三十三身』のリストに多くの『婦女身』が挙げられていたことが、後の観音の女性化の過程で大きな意味をもっていたことは間違いないだろう」と推定している。

冒頭に述べたように、ブッダ「男性」という歴史的事実は、菩薩が男性であったことにも疑いを挟まなかった。しかし女性の菩薩や如来がおらず、女性が救われたいとすれば、一切衆生を平等に濟度するものとする仏教の思想との整合性が取れなくなってしまう。そこで考え出されたのが初期大乘経典である『妙法蓮華経』の「提婆達多品」などに見られる「変成男子」の思想である。「提婆達多品」には、八歳の龍女という少女が忽然として男性の身体と

なつて成仏したことが説かれていた。この時代、女性には「五障」として決してなることのできぬ五つの身分・状態があるとされ、そのひとつが「一身」であった。つまり、女性は女性の身体のままでは仏になれぬと主張されていた。これに対し変成男子は、女性であつても男性の身体になることによつて、仏になれるとした思想である。これに基づけば、観音菩薩も元は男性であつたが女性化して菩薩となつたと解釈し得る。

変成男子は女性の成仏の可能性を説きながらも、五障の思想とともにはしばしば仏教の女性差別と見て現代の視点から批判されてきた。しかし、原典に基づき仏教の女性観を通仏教史的に辿ってきた植木雅俊によれば、本来の仏教では悟りの可能性において男女の差はなく、平等であつた(「差別の超克」講談社学術文庫、『テリー・ガーター』

角川選書、Gender Equality in Buddhism: Peter Lang Publishing)。ブッダ自身は男女の平等を説いたが、ブッダ入滅後の部派仏教の時代に男性僧侶の地位が権威化し、インド古来の女性蔑視が復活して説かれるようになった。それを再び否定して男女平等の仏教に戻そうとしたのが大乘仏教の変成男子の説であつたという。「法華経」においては「何としても女性の成仏を信じようとする小乗仏教徒を説得する手段として」(「差別の超克」)変成男子が説かれたが、後の『海龍王経』などでは女性が女性のまま成仏できるとされ、ブッダの教え本来の男女平等に戻つた。この植木説に基づけば、観音菩薩が時に女性の姿を取るのも濟度のための方便であつて、その本質たる慈悲は男女を超越している。とすれば、観音菩薩の生物学的な性を問うこと自体が無意味と理解されるであろう。

一步一步煩惱減除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

七十七段 一生懸命はその人を輝かせる

どんな分野においても先達は誇りを持って自分の持てる力を注いでいる。一心に挑戦をしている人は、たとえ人に馬鹿にされても、決してあきらめない。結果も大事だが、一生懸命に取り組む過程が人を輝かせる。

『高尾山健康登山の証』のお勧め
年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一の登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



紙面……七百元
スタンプ……百円

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」 腐草為螢

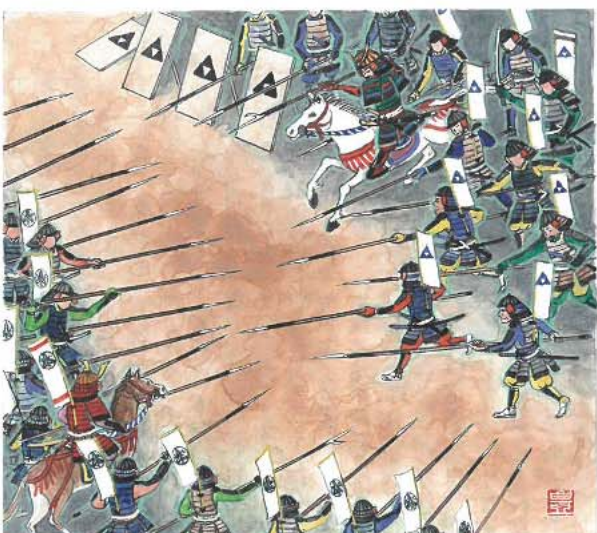
「くされたるくさほたるとなる」
六月十日〜六月十四日頃
螢は土の中で育ち、地上で羽化します。螢の生態が知られていなかった昔は、枯れた草が螢に変化すると思われていました。そのため、朽草の別名もあります。現在では少なくなりましたが、八王子市内にはまだまだ螢を観察できる場所が残っております。

今月の風物詩 百合

ユリは観賞用として栽培されており、洋の東西を問わず文化に根付いた花です。日本においてはユリは、園芸用の花であるだけでなく、種類によっては鱗茎(球根)が食用に用いられてきました。高尾山でも六月中旬になると各地でヤマユリが咲き始めます。

高尾山小物語 14

廿里の戦い



絵・橋本豊治

古甲州道と甲州街道

戦国時代まで甲斐国から武蔵国への道中は、現在の小管村付近から奥多摩を通り、八王子に至る古甲州道が一般的であったが、江戸時代になると、小仏峠を通る道が甲州街道として整備され、主流となっていた。

小田原北条氏は、関東において勢力を拡大させていく一方で、同盟を結んでいた甲斐武田氏と敵対するようになった。

武田信玄が、関東へ侵攻してくると、北条氏照が籠る滝山城にて攻城戦が行われた。

時期は定かではないがこの「滝山合戦」の前後に武田家臣の小山田信茂の率いる別働隊が、上野原方面から小仏峠を越えて奇襲してきた。意表を突かれた氏照軍は、「廿里(現在のJR高尾駅北口の廿里町周辺)」で迎撃するも敗北を喫した。

不意を突かれたのは当時、甲斐(山梨県)から武蔵(東京都・埼玉県)へ進軍する道は小仏峠ではなく、滝山城北方の古甲州道が主流であったので奥多摩方面を警戒していたためと伝わる。

今できる 一生懸命 運は必ず 巡り来る

高尾山の昆虫

クロハナムグリ

ハナムグリの仲間には五月頃からその数が増え、各種の花上にはしばしばその可愛らしい姿を見かけるようになります。



通常よく目にするのはナミハナムグリ、アオハナムグリ、コアオハナムグリ等の緑を基調にした色彩の種ですが、その中に黒色で、上翅の中央部に白くクリーム色の横帯が入るクラシックな感じのハナムグリがいて、これはクロハナムグリ(黒花漣)です。コアオハナムグリと同サイズでいろいろな花で見られるハナムグリですが、不思議にそう多くはありません。

興味深いのは時に樹液に来ることで。本種にやや近縁と思えるアカマダラハナムグリが特定の濃度の樹液に集まることが知られていますが、本種は花蜜だけでなく樹液を含め食性は広いのかも知れません。

また伐採されたクヌギやコナラの切り株で、本種が多数日光浴をしているかのような光景に出会いましたので、幼虫は朽木に依存しているように感じます。

小さいけれどシックで気品があるクロハナムグリは、生態が解明されていない部分があり、そこがまた魅力だと思えます。

(撮影・文松島 孝)

健康登山者投稿作品

高尾山が恋しい

八王子市 西山 正子

今年は今年で、猛進という字が浮かぶ。月日が過ぎるのは早く、もう五月も過ぎました。

春を思い返すと、荘厳な薬王院の奥之院に寒桜がいち早く春を告げ、二丁平の山桜が散り春が終わりました。

元号が令和と改まり、私自身はちっとも変わらないのに世間は騒がしいです。

高尾山には千六百種類以上もの植物が自生しているそうです。

これから心地よい季節を迎えて登山者も大勢こられるでしょう。

魅力ある高尾山は、どこか行こうかという時、足が自然と向くのです。





高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様への祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。

お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたという事を、忘れてはならないと思っております。

尚、毎年十二月十日までに、一万円以上を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

駒ヶ根分霊院例祭

五月三日(金)



分霊院本堂で御護摩修行が厳修された

石倉分霊院例祭

四月二十九日(月)



分霊院まで練行が行われた

おはなし散歩道

なるほど豆腐

湯沢町 富樫あい子

むかし、むかしのこと。甲州街道に立派な店構えの豆腐屋があった。

「神之豆腐屋とは？」

みすぼらしい身なりの坊さんが看板を見上げて店の中の婆さんに、「水を一杯願いたい」

声をかけた。婆さんが、鋭い声で、「お代官様へ命がけの豆腐作りだ。店が吹っ飛ぶかも知らんのだ。坊主に水を汲む暇はない！」

坊さんの頼みをじゃやんにことわった。

しかたなく坊さんは、とぼとぼ歩いて行くと、店先から水が流れ出ていた。見ると豆腐屋だ。奥で娘が豆を洗っている。

「豆腐屋さん。水を一杯願いたい」

娘が振りむくと、明るく声が返ってきた。「はい、お持ちします。縁台に入ってください」

お掛けください」

坊さんは汗を拭き拭き、腰を下ろした。「はい、どうぞ！」

「水は、娘でなく子供の手で運ばれてきた。ありがたう。何歳だ？」

「九歳、トミといいます」

「ほお、感心じゃ」

豆を洗っている手なれた姿は子供とは思えなかった。爺の手伝いで、トミは、婆と両親に死に別れ、爺と二人で豆腐を作っている。近所では美味しさと評判の店だ。

「今、爺は足が悪くて思うように豆腐作りができません。奥で寝ています」

水を飲んだ坊さんは、「豆腐が食べたいのお」

「朝に売られているのが、みをしてるんですけど、お」と言いつつ奥から拍子木切りにした豆腐を、お椀に入れて持ってきた。

「これでよかつたら召し上がってください」

坊さんは不思議そうに椀をのぞいた。トミは、「実は、豆腐好きのお代官さまがご用達の豆腐屋は工夫がない「なるほど」とうなる豆腐を造れど、上ノ豆腐屋と、下ノ豆腐屋にお題がだされました」

◎一里の豆腐と、一杯でも沢山食べた気分になる豆腐を造って来い。

「うちは下ノ豆腐屋です。上ノ豆腐屋の婆さんにはかないません」

「神之豆腐屋もあるな」

トミはくすくすと笑い、「字を変えているみたい」「そうか神との」

坊さんは顔をゆがめた。「二里か、それで拍子木切りの豆腐にしたのか」

「失敗です。ハハハ」

トミは明るく笑った。「工夫のない豆腐屋はつぶすと言われました」

「それは、困った！」

「トミは爺の笑顔が見たいから工夫します」

トミの明るさに坊さんは感心していた。

そこへ「神之豆腐屋の

婆さんがやってきた。坊さんをジロツと見て「じゃまするな」といい、「トミ、豆腐作りは明日の朝までだ。止める！ 爺も寝ていることだし、お前には無理だ。いすれ潰される。豆腐屋はわしの家一軒で充分だ！ 面倒なお題なんぞ作れん！」

婆さんは、トミに豆腐屋を辞めるように言いに来たのだ。トミはしょんぼりしたが、「お坊さん、トミは力を尽くしてみます」

「そうだ、祈っているぞ」

坊さんは、また甲州街道を歩いていった。

トミは考えているうちに眠ってしまった。

目を覚ますと朝日が金色に輝き、坊さんか？ 神様のような声がボーンと聞こえてきた。

『言う通りに作りなさい』

「はい！」

トミは無心に作った。そして代官さまの前に差し出した。

「二里は三六町(丁)豆腐三六丁、持参しました」

「なるほど！」

代官はトミに「あつぱれだ！」と褒めた。たえた。その後、旅人に評判となり大繁盛し、八杯豆腐が江戸の名物になった。

話によると上之豆腐屋は、突然、突風が吹き、婆さんもろとも風に吹き飛ばされて消えてしまったんだと。

(おわり)

(挿し絵・小出茂)



「なるほど！」

代官は納得した。「それでこの椀は？」

「はい、出し四杯、醤油二杯、酒二杯で味付けした。八杯豆腐といいますが、二杯でも八杯です」

「なるほど、よく工夫した！ うまい」

代官はトミに「あつぱれだ！」と褒めた。たえた。その後、旅人に評判となり大繁盛し、八杯豆腐が江戸の名物になった。

話によると上之豆腐屋は、突然、突風が吹き、婆さんもろとも風に吹き飛ばされて消えてしまったんだと。

(おわり)

(挿し絵・小出茂)

富士登拝修行 代参守のご案内

富士登拝修行は平成十九年に執行され、本年度十三度目の登拝となり、本年も七月三日〜七月八日の行程で、高尾山麓から富士山頂へ登拝修行を執行致します。例年の如く徒歩修行にあたり、代参守りを有縁の皆様方に授与致します。

この代参守は、高尾山御本尊・飯縄大権現様から富士山まで続く祈りの道を、修験者によって歩いて運ばれるものです。

道中、各参拝所で、東日本大震災により被災された方々の安全、被災地の早期復興、国土安穩の祈りを込めながら、富士山頂での法案においては、申込者の御芳名を読み上げ、諸願の成就を祈念いたします。その後、高尾山麓での成満柴燈大護摩供にて御守を御加持したのち、登拝修行期間中、御宝前にて祈願されている碑伝(木札)と共に授け致します。

古式に則り高尾山より歩いて参拝する、富士詣「霊峰富士登拝修行」の代参守、本年一年の、諸縁吉祥・諸願圓滿の為に、ここに御案内致します。

尚、代参守は高所運搬が伴うため、数量に限りがあります(予め)ご了承ください。



授与料

代参守と碑伝合わせて
一体壹千円以上
申し込み

山上・お護摩受付所又は、葉書に、郵便番号・住所・氏名(富士山頂にて御芳名の読み上げを致しますので必ずフリガナを明記して下さい。)
電話番号を明記して、左記までお申し込み下さい。

締切 六月三十日(日)

〒一九三二八六八六
八王子市高尾町二七七
大本山高尾山薬王院内
富士登拝事務局

高尾山子供やまぶし修行体験会

高尾山へ古来より伝わる、やまぶしの修行を体験してみませんか? 山に広がる大自然の中で、やまぶしと共に滝に打たれたり、山歩きをして困難や試練に耐える強い心を鍛えてみましょう。

夏休みの思い出作りとしても、是非ご参加下さい!

記

日 時 令和元年八月四日(日)
場 所 高尾山麓不動院 午前八時集合
参加費 五千元
対象者 小学生 定員八十名
申込期間 五月三十一日(金)より七月二十六日(金)まで

行 程 出発→滝行(琵琶湖)→山歩き(自然研究路)→食事・腕輪念珠作り(薬王院)→柴燈護摩修行参加(有喜苑)→下山(ケールプール使用)→不動院到着・解散(午後四時半頃)

*定員八十名(先着順)とさせていただきます。

*ご参加希望の方は、先の連絡先までハガキにて、参加児童の氏名・学年・性別・住所・電話番号・緊急連絡先を必ず明記の上お申込下さい。

〒一九三二八六八六 八王子市高尾町二七七番地 以上
電話(〇四二)一六六一二二一五
FAX(〇四二)一六六四二九九
高尾山秀峰会事務局

城崎先生のご冥福をお祈りします

高尾山報に『万葉集から見る日本の古典』を連載されております、獨協大学特任教授の城崎陽子先生が、病氣療養中のごとき、去る五月二十八日、ご逝去されました。

城崎先生はまた、富士行者として富士講の丸藤宮元講の副講元を務められており、高尾山で行われている火渡り祭にも参加されておりました。

高尾山報においては、平成二十二年六月号から平成二十八年十二月号まで、富士修験道を主題とした『富士に祈る』を連載され、同名の書籍も出版されております。平成二十九年一月号から執筆されておりました、『万葉集から見る日本の古典』の、先月号(第二十九回 文武期 その二)が絶筆となりました。通夜は五月三十日、葬儀は五月三十一日に「コムウエルホール高門寺」にて行われ、多くの人に惜しまれながら、しめやかに執り行われました。

茲に謹んで、故・城崎陽子先生のご冥福をお祈り申し上げます。



火渡り祭に参加される在りし日の城崎先生

院内散歩 28

～薬王院の展示物～



木版画 『古都悠久・閑』 作・井堂雅夫

高尾山報助成金志納者 御芳名(順不同・敬称略)	高尾山報助成金志納者 御芳名(順不同・敬称略)
藤沢市 高山 くら子	八王子市 瀬沼 ミヨ子
八王子市 山本 千枝子	宮城 菊太郎
入間市 粕谷 亀夫	新座市 高橋 久子
茅野市 原 光男	伊勢原市 佐々木 晋介
高崎市 磯貝 幸男	本庄市 諏訪 淳
千葉市 峰 浩彰	八王子市 小池 まり子
八王子市 石井 征二	川口市 八木橋 弘子
桐生市 山根 増巳	大里郡 吉田 進
茅ヶ崎市 椎名 佳子	八王子市 内田 英代
横濱市 丹羽 節子	上野 千恵子
新座市 彰山 粧麗	平 林子
宇都宮市 赤羽 松男	徳田 宏晴
杉並区 清水 佐	荒川区 古川 恵子
	足立区 中山 恵司
	陸前高田市 小林 信雄
	八王子市 佐藤 亮
	菊地 フミ子
	邑楽郡 高橋 富美男
	北本市 横田 信治
	立川市 牧 梅子
	八王子市 松山 澄子
	千葉市 市川 麗子
	児玉郡 相馬 シズ江
	入間市 柳建信工業 憲子
	新潟市 金子 憲子
	桶川市 関根 章
	行田市 松本 恵美子
	八王子市 伊関 則夫
	児玉郡 上原 一夫
	高尾山健康登山者一同



登山だより

七月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

十二日、二十四日

弁天様御縁日

一日

御詠歌勉強会

八日

(十時山麓不動院)

仏舍利詣り(仏舍利塔)

十二日

お施餓鬼大法要

(十三時山麓不動院)

二十八日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)



二十一日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯繩大権

現様の日々の御加護に感

謝し、沢山の御供物を捧げ

て御本尊様威光倍増の為、

御供養申し上げる法要で

す。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修

御志納金 一口三千円以上

毎日の お護摩奉修時間

(4月15日〜10月31日まで)

午前5時30分
// 9時30分
// 11時00分

午後0時30分
// 2時00分
// 3時30分

ご講中・団体等御相談
下さい。

第三十八回 高尾山写経会

七月二十八日(日) 午前九時半集合

会場 高尾山薬王院大本坊

会費 お一人 三千円也(昼食付)

申込 葉書に住所・氏名・電話番号を明記の上、

左記までお送り下さい。

〒一九三二八六八六

八王子市高尾町二七七 高尾山写経大会係まで

TEL〇四二一六六一二二五

※定員(百二十名)になり次第締め切ります。

◎夏期講座のお知らせ

日時 高尾山写経大会後の午後一時より

会場 高尾山薬王院大本坊有喜閣大広間

講師 金岡 秀郎 先生

八王子市妙薬寺住職、国際教養大学特任教授、主な

著書に『モンゴルを知るための六十章』、『モンゴルは面

白い』、『リアル・モンゴル語』等



有喜閣での写経の様子

尚、写経に必要な諸道具は、当山にて用意致します。
誠に勝手ながら準備の都合上、お早めにお申込下さい。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷 秀文
編集人 渋谷 秀芳
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
<http://www.takaosan.or.jp>

